

## 奈良・飛鳥京跡

1 所在地 奈良県高市郡明日香村岡

2 調査期間 第一二九次調査 一九九三年(平5)一月～三月

3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所

4 調査担当者 林部 均

5 遺跡の種類 宮殿遺跡

6 遺跡の年代 七世紀後半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥京跡の発掘調査は、一九六〇年の第一次調査以来、すでに一三〇次を数える。調査の結果、北側に方形区画をもつ内郭と、その



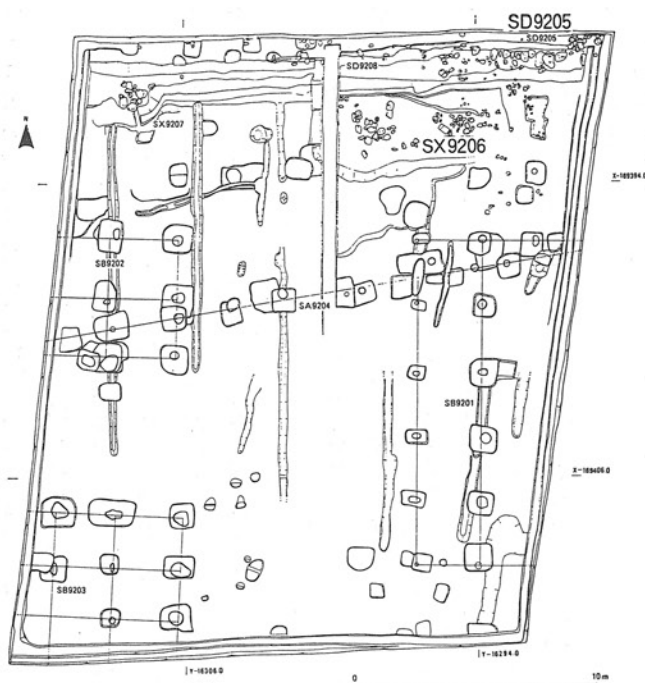
(吉野山)

南東に方形の区画をもつエビノコ郭、さらにそれらをとりにかこむ外郭の存在が明らかにされている。しかし、遺構にいくつかの重複が認められ、飛鳥時代中ごろから後半にかけての宮殿遺跡であることは間違いないが、具体的な宮殿名の比定まで

には至っていない。また、建物配置の復原にあたっては、多くの問題が残されている。

今回、木簡が出土した第一二九次調査は、飛鳥京跡の内郭と飛鳥寺のほぼ中間にあたる位置を対象とし、この地域の土地利用の検討を目的として実施した。

調査の結果、掘立柱建物三棟、掘立柱塀一条、石組溝一条、素掘



飛鳥京跡第129次調査遺構図

り溝一条、不整形の落ち込み二カ所、土坑などを検出した。掘立柱建物には廂をもつ大型建物と総柱建物がある。ともに飛鳥時代後半（飛鳥Ⅳ）に廃絶している。木簡はこれらの建物群と同時期と考えられる石組溝（SD九二〇五）と、不整形の落ち込み（SX九二〇六）から出土した。ともに大量の木製品や飛鳥時代後半の土器が共伴した。なお、SD九二〇五は建物群の廃絶とともに埋め立てられており、また、SX九二〇六は建物群が廃絶したのちに掘削され、すぐに埋め戻され、その上に新たな掘立柱堀、素掘り溝がさきの建物群とは方位をたがえてつくられている。これらの遺構の廃絶時期も、大量に出土した土器などから飛鳥時代後半と考えられるので、SX九二〇六の掘削から廃絶まではきわめて短期間であったことがわかる。そこで、これらの木簡の埋没年代も、飛鳥時代後半（飛鳥Ⅳ・Ⅴ）の限られた時期に求めることができる。

## 8 木簡の积文・内容

(1)   
 御   
 了

之   
 由   
 (161) × (6) × 5 081

(1)は文書木簡で、両面に墨痕が認められるが、半分に割れた状態で出土しており、内容は不明である。SX九二〇六からの出土。

他にほぼ完形の〇三一型式の木簡状木製品一点が、SD九二〇五

から出土している（長さ一一五mm幅二二mm厚さ三mm）。文字はまったく残っていないが、切り込みの形状や木簡の大きさなどから、隠岐国からの貢進物付札木簡と考えられる。

なお、木簡の积読は和田萃氏にお願いした。

## 9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所「明日香村飛鳥京跡―飛鳥京跡第一二七次―第三〇次―」（『奈良県遺跡調査概報 一九九二年度』一九九三年）

（林部 均）